巻頭言

技術集団としての「誇り」「自信」を持とう

常任参与　　松　橋　数　保

昭和から平成へと時代は変わっても、国の内外を問わず政治、経済の激動は当分続きそうである。

昨年は国内では参議員選の自民党の大敗、一見安定成長が続いているように見える日本の経済も日米の経済摩擦からの先行き不安、イラン－イラク戦争がやっと終結したのも束の間、ベルリンの壁が撤去されると東欧諸国の従来の大勢は、なだれ現象的に民主化へと進み、ソ連では極く最近一党独裁が放棄され目まぐるしい動きのなかで、国内では衆議委員選挙が行われようとしている。

私が技報の巻頭言に敢えて、このようなことを書く気になったのは公団をとりまく環境を思うからである。公団が創立され満29年を迎えようとしているが、これまでの公団の歴史をふり返って見ると何度かの試練を経た日本の現在の姿、日本をとりまく現在の環境が似ているような気がしてならないからである。

公団をとりまく難しい環境（例へば住民との関係、関係諸官庁、団体関係…等々）に対して、我々の説明することや、意志がどの程度まで認識されているのか疑問を感じざるを得ない。だからと云って我々が自覚している公団の責務を疎かに出来るものではない。

阪神低速道路だとか、料金が高いとか…の批難も我々一人々々の受け止めかたの問題であり、すべてを悲観的に考える必要もなかろう。我々には大きな目標があり、少なくとも阪神道路公団の技術集団の一員として「誇り」と「自信」を持って直面する問題に決意も新たに前進しようではありませんか。